

追悼

Cyril Jack Keattch 博士 追悼文

Cyril Jack Keattch 博士が7月9日夕方心臓発作で逝去された。国際熱測定連合会長 Edward L. Charsley 教授の知らせによれば、博士はそれまでなんの前兆もなく、健康を享受されており、死は突然のことであったという。ここに慎んで哀悼の意を表したい。

Cyril J. Keattch 博士は、日本と大変縁の深い方である。これまで、1976年11月と1992年10月に2回来日されている。最初の来日の目的は、東北大学の金属研究所を創設された本多光太郎教授の業績を調査することであった。本多光太郎博士は、保磁力の高い永久磁石材料であるKS鋼の発明者としてつとに有名であるが、Keattch 博士の調査目的は、本多博士の熱天秤の発明と熱重量測定の新規であった。大塚良平教授がお世話をされ、仙台を訪問したり、本多式熱天秤を使って研究された斎藤平吉博士から当時の様子を聞き取るなど、有益な調査活動を進められたようである。「鉄は熱いうちに打て。」という意味の本多博士の漢文の揮毫の写を筆者に示して意味を聞かれたことを覚えている。この調査を含めた科学史的研究の成果は、1977年に "The History and Development of Thermogravimetry" と題する学位論文にまとめられ、Salford 大学に提出されて、Doctor of Philosophy の学位を取得している。1992年の来日の主な目的は、東京で開かれた第28回日本熱測定討論会に出席することであった。討論会では本多博士の業績を中心として熱重量測定の歴史的展開を講演されている。講演を覚えておられる読者も多いことと思う。また、本多博士の熱天秤発明75周年を記念して、Keattch 博士は、"Kotaro Honda - his Thermobalance and his Achievements" を会誌「熱測定」17巻2号(1990)101頁に書かれているから、関心がある読者は読んでいただきたい。

第1回の国際熱分析会議は、Robert C. Mackenzie 博士が中心となって1965年にスコットランドのAberdeen で開催されたが、Keattch 博士はMackenzie 博士を補佐して会議を成功に導いた一人である。また、1965年の英国化学会分析化学部会熱測定グループの創立メンバーでもあり、亡くなるまで名誉幹事であった。以来、さまざまな形で国際熱分析連合 (ICTA; 現在の国際熱測定連合, International Confederation for Thermal Analysis and Calorimetry; ICTAC) などの活動に参画されている。ICTA 用語法委員会の初めの、そして唯一の、名誉幹事である。ICTA 標準化委員会の活動にも英国を代表して参加されている。さらに、



1992年東京、ICTACメンバーの会で。右から、Keattch 博士、Warne 教授夫妻 (オーストラリア)、小嶋博士、大塚教授、Sestak 博士 (チェコ)。

1973年以来長らく ICTA News (と後の ICTAC News) の編集を行ってきた。Journal of Thermal Analysis の Regional Editor もつとめている。また、"An Introduction to Thermogravimetry" (第1版、1969、Heydon & Son; 第2版、D. Dollimore との共著、1975、Heydon & Son) の著者でもあり、参考とされた方も多いと思う。

Keattch 博士は、1928年6月17日にロンドンに生まれ、ロンドンのCollegeに進んだ頃から化学に興味を持ち始め、自宅に実験室を作っている。小さな爆発もあったようである。1952年にThe Northern Polytechnicsを卒業した。British Non-Ferrous Metals で分析の研究に従事した後、International Nickel Co. (Mond) Ltd. の白金族金属部に移り、貴金属の研究に従事していて初めて熱分析に関心を持ったという。その後、John Laing 研究開発会社の土木技術部門のChief Analyst となり、建築材料分野の熱重量測定に大きな業績を残した。1967年には会社を去り、自宅に実験室を作り、熱分析を専門とする独立のコンサルタントとして事業を展開するかたわら、Tudor House Hotel も経営していた。

このように、Keattch 博士は、戦後自動化などにより熱分析が多くの分野で活用されるようになった歴史を歩いてきた人といえる。また、多くの趣味を持ち、人生を楽しまれたようである。惜しい人が亡くなったことは残念である。あらためてご冥福をお祈りしたい。合掌。

(千葉工業大学 小澤丈夫)